

2022年8月分総評 杉本真維子

「きうきうと鳴く長茄子の袋詰め」李いう子（佐賀県）

長茄子が、つややかなその皮をビニール袋にこすられて鳴いています。「かわいそう」と「かわいい」が混ざり合ったような感情がじわりと湧いていて、その二つの言葉の語源が同じであることを実感します。

「生きものはだめと母の言う夜店」藤田ゆきまち（三重県）

子どもの頃によく言われたものですね。大人になるにつれ、「生き物はだめ」の「だめ」の意味が深まります。

「露寒の大黒ふ頭ナンカイエヨ」藤雪陽（長野県）

言葉を持たない自然。その無言の不気味さに改めて畏怖を覚えます。

「人のドライヤーの風が心地よく」鯨井鴉舅（千葉県）

公衆浴場の脱衣所での一コマでしょうか。裸体に不意に受ける他人の風があたたかく心地よいのはなぜなのでしょうね。考えてみたら不思議なことです。

「夜の雷／そのたびに／空の裂け目から探されている／いまのところ／隠れおおせている」（春町美月（大阪府）

稲妻が持つ“矢印”に目をつけ、それと地上の「わたし」を線で繋いで、関係を作り出しています。鮮やかな作品です。

「来世の仕事を告げて蝙蝠は／つまらなそうに森へと帰る」小林紅石（埼玉県）

「つまらなそう」に森へと帰る蝙蝠がなぜかいとおしいです。その憂鬱さは人間のそれと少しも変わらないかもしれません。

「耳に溜まった生ぬるい水から／神様の声がした」青野椰栄（東京都）

あたたまった水が耳のなかを移動するときの“あの感じ”に「神様の声」という言葉をあてたのは大変効果的だと思います。

「身体から妙な音がして／腰かけるほたり／命が淡くなる匂い」こはくいろ（大阪府）

こはくいろさんが持つ身体性は特筆すべきですね。命のすがたが敏感に描き出されています。

「古代からここにいたのか／落羽松の枝の下で／にわか雨をやり過ごす」ヒラノユリア（神奈川県）

連綿と続く歴史の切っ先にいる「わたし」。その事実が雨宿りによってふとリアルに迫ります。雨という自然物に触れることで、遠い昔に自然から分化した生命のことや自己を超越した記憶のようなものが引き出されるのでしょうか。

「孤独とは特別ですか／文化祭の喧騒からは遠い図書室」青野陽（熊本県）

孤独のさびしさよりも、むしろ遠くに人がいる安心感が際立っています。孤独とはさびし

いだけのものではないことがわかります。

「艶々の受話器が廊下で構えてて／よっこいせつと祖母は呟く」マズルカ（山口県）

「受話器」と「廊下」という言葉の組みあわせによって作られる感情がたしかにあります。

「艶々」は比喻でなく本当のことで、自宅にしながら他者と繋がれる電話というツールが
いかに特別なものだったかをよく表しています。

それでは、次回も楽しみにお待ちしております。